

## 「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

### 第9回フォーラム検討会議

#### 逐語録

(木村) それでは第9回フォーラム検討会議を始めます。今日は3時間なので、サクサクと進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、資料に番号を振っていききたいと思います。第9回フォーラム検討会議の議事次第が一番上にあります(F9-0)。その次に、前回の議事録案です(F9-1)。逐語録がF9-2になります。前回は模擬フォーラムをやったので、かなりの分量になっています。本当は、これを基にファシリテーターのためのマニュアルを作る予定だったのですが、私に時間の余裕がなくて、無理でした。次がフォーラムの参加申込書ですが、最初に市民側のものが来ています。Q4が「あなたは、現在、どちらにお勤めですか」になっているようです。これがF9-3です。次に、Q4が「経歴は、どれにあたりますか」になっているほうが専門家側のものです(F9-4)。

似たような、フォーラム参加申込書が2枚あります。1つ目が首都圏住民の申込者の回答です(F9-5)。次が、原子力学会員の回答者です(F9-6)。

次に、申込書に関係する部分だけピックアップした社会調査結果があります。これがF9-7になります。今のところの資料はここまでです。大丈夫でしょうか。

それでは、早速議事に従っていきと思いますが、今日は議事録の確認をした後、フォーラムの参加者の確定を行ないます。これが必須事項です。

その後、コミュニケーション・マニュアルの最終検討をして、その他ということになります。コミュニケーション・マニュアルは、現在竹中君が印刷をしている途中だそうで、もうすぐ来ると思います。

#### 0. 議事録確認

(木村) それでは、まずは議事録の確認です。

前回は模擬フォーラムをやろうということでしたけれども、その前にフォーラムの検討ということで、少しディスカッションをさせていただきました。その上で模擬フォーラムを実施しました。議事録で、サブファシリテーターの役割に下線が書かれていますので、私がまとめる必要はないような気もしますが、これを基に私のほうで計画書のほうに書き込むなり、したいと思っております。

これだけで時間が終わってしまったので、計画書やマニュアルの検討は今日に先送りということになりました。

最後のページに、会場図とか、グループワークの方法が図でまとめられていますので、参考にしてください。

—— イメージがつかめますね。

(木村) 今回は、配布が直前になってしまったので、メールで確認する時間がなかったと思いますけれども、何かあれば、後ほどメールでご連絡いただければと思いますので、よろしくをお願いします。

### 1. フォーラム参加者確定

※本項目については、個人情報等を特定できないように注意して、情報を加工しています。

(木村) 前後しましたけれども、本日は社会調査グループから土田先生がいらっしゃっていますので、一言お願いできますか。まあ、すでに全体会合ではお会いしていますけれども。

(土田) 社会調査グループの土田です。

1月中を主として実施されたのですが、社会調査が終了しました。データも上がってきています。それで、グラフを作成して、F9-7のような形にまとまってきました。

あわせて参加申込書も受け取っていますので、それについて本日は検討したいと思います。それから、一番目玉だった一般の方があまり申し込みがなかったので、新たに募集しなければならない。

社会調査のほうとの兼ね合いでいうと、申し込んできた人たちの意見が全体の中のどの辺にあたるのかということが、調査の結果に突き合せれば分かりますので、そういう形で調査を活用して、その都度、フォーラムでどういう影響を受けたのかということのを少しぐらいは測定できればと思っています。以上です。

(木村) ということで、今日の1つ目の議題はフォーラム参加者の確定ということですが、今のお話にもありましたが、首都圏のほうの申し込みは、F9-5を見ていただくと分かると思いますけれども、8名です。学会員のほうは25名です。

一般の方のほうが少ないのですよね、と調査会社の人に聞いてみたら、「でも回収数から考えたら、一緒ぐらいですね」と言われています。どうしてかという、一般の人たちには500しか配っていないから。学会員には1400配っているの、割合を考えれば同じぐらいでしょうか、という話をしていました。

もしかすると来年度は、そういう意味で少し考え方を変えたほうがいいかもしれないで

すね。

(土田) そうですね。

(木村) まあ、それは来年度議論したいと思いますが、もしかすると本当に、勧誘のためだけのものにして、安くあげたほうがいいかもしれないですね。

(土田) そうですね。

(木村) それで全部ここでチェックできるスタイルを取れるのであれば、それでも構わないかもしれない。

(土田) あるいは、それだけだったら、別途ネット調査みたいな形でやったほうが安くあがるのかもしれない。

ただ、どうなのでしょう。こういうところに参加したいといってくる人で、普段ネットは全然やっていません、というような方はいるものなのですか。こういうところに来る人というのは、ネットをやるのが当たり前というのであれば、ネット調査で全然問題はない。

—— 女の方はどうでしょうか。お年を召した女の方。

—— 年齢が高いと、ネットをやらない人は多いですね。昨日も、あるワークショップで、「ホームページを見てください」と言ったら、「そんなのは駄目だ」というような意見がたくさん出ていました。

—— ホームページを見てくださいというのは、駄目なのですか？

—— そんなのはとんでもないと言われました。

(土田) でも、あと3、4年ですよ。昨日電気店に行ったら、テレビがインターネットの端末になっていましたから。

(木村) でも、地デジ化でテレビ離れしたのは高齢層ですけどね。

そういうことも踏まえて、今年度は、少し課題があるということを明らかにしておいて、来年度に引き継いでいきたいと思います。問題点としては、母数が500だと回収数が少し届かなかったということですね。ここは明記しておきたいと思います。

(土田) 選ぶという作業をいれるのであれば、倍か3倍の応募者はほしいですね。

(木村) 今回は、初めてだったということと、勧誘の紙だけしかデータがなかったというのも、申し込みが少なかった原因だと思います。来年度になると、今回やったことが全部ネットに出て、こういう話をするのだなということが分かるので、少しは回収数が上がるかなと思うのですけど。

原因としては、1回目だったということと。あとはやはり全体の数の問題もあるかなと思いますね。

(土田) でも、これはパーセントでいうとかなり低いですね。

(木村) 低いです。ちなみに、首都圏調査のほうの実質回収率みたいなものを聞くと、正確には計測はしていないそうですが、10%ぐらいだそうです。

(土田) であれば、調査票を届けに行ったときに、これを配ってもらえばいいのですね。つまり、5000軒には回っているはずなのだから。そうすると、これの10倍、50人くらいは申し込みが来る可能性はある。もっとも、調査に拒否する人だから、実質同じかもしれないけれども。

(木村) 今、竹中君から2つ資料が出てきましたけれども、番号だけ振っておきたいとします。「コミュニケーション・マニュアル」がF9-8です。報告書様式のもの、「コミュニケーション・フィールドの関連研究整理」から始まっている資料がF9-9です。

それでは、1つ目の議題、フォーラム参加者の確定に関してですけれども、資料としては、F9-3～F9-7が関連する資料になっております。F9-3が首都圏住民の参加申込書。その回答がF9-5になっています。

(土田) 少し説明しましょうか。

(木村) はい。では、ここに関しては説明をいただけますか。

(土田) ではF9-3とF9-5をご覧ください。

まず性別ですが、1が男性で2が女性ということになりますので、女性が2人、男性が6名になります。

年齢は、20～40代が3人、50歳以上が5名です。

一番肝心のところですが、Q5、賛否です。ご覧の通り、原子力を「1. 利用していくべき」

と考えている人は誰もいません。「4. どちらかといえばやめるべき」「5. やめるべき」がほとんどです。よくて、「3. どちらともいえない」です。

Q6の不安は、高いです。「3. どちらともいえない」という人もいないです。皆不安です。

Q7原子力がなくても経済発展できるか、というのは少しばらつきがあります。「4. どちらかといえば発展できない」が2人ほどいらっしゃいますけれども、全般的な傾向としては、原子力なんかなくてもいいという意見分布になっています。

(木村) このQ5、6、7、8、9に対応する部分をピックアップしたものが、F9-7です。本調査の対応する部分の結果が示されています。

後半は、参考までに、原子力に携わっている人に対する印象を載せています。

(土田) 本調査(F9-7)の17ページ、原子力を廃止したほうがいいかどうか、これが申込書の賛否(Q5)に対応するわけですが、学会員はほとんど廃止する必要がないという回答です。

首都圏住民ですが、昨年度と今年度の調査では、半分くらいがやめるべきだと回答しています。ただ、半分なのです。一般市民でも、「利用すべき」は20%くらいはいるのです(残りは「どちらともいえない」)。

フォーラム参加を申し込んだ人に「利用すべき」という人がいないということは、反対したいという人しかフォーラムには申し込んできていないということになります。もし参加者を追加するなら、「利用すべき」側の人を入れるというのが、ひとつの考え方です。

(木村) 原子力の安心-不安については、本調査でも安心という人はほとんどいないので、新しく追加するにしても不安はほぼ気にしなくていいということですよ。

(土田) 一般人で、原子力が不安じゃないという人は、極めて例外です。不安じゃないのは原子力学会員ぐらいです。

(木村) 逆に、F9-7の20ページを見てもらえばと思いますけれども、「どちらかといえば発展できない」という人は、それなりにいらっしゃるのですよね。

(木村) だから、追加するとき、この部分は少し考えてもいいかもいいかもしれないということです。

(土田) そうですね。幸いQ7(経済発展)は、4とつけた人が2人いますので、その辺をどう考えるか。

結局、5回とも出てきてくれるというハードルをクリアした人という制限をつけると、一

般的な分布からは少し偏るということですね。その偏りをどう考えるかですね。この調査をやったことを活かすのではあれば、一般の意見分布に合わせるということを私としては提案するのですが。しかしフォーラムはフォーラムでまた独自の考え方があるでしょうから。

(木村) いくつか考え方があります。

今、8人応募があります。この8人を全員採用にするのか。それともこの中からピックアップをして、さらに加えるか。そこを検討しなければいけないと思います。

少なくとも性別、年齢別は分けておきましょうという話だったので、それを優先するなら、足りない層のところに入れたいといけませんが、どうでしょうか。

(土田) 何にしても、男女半々にするというのであれば、女性を追加しなければなりません。それから、やはり40代、30代の方は、来にくいから応募が少ない。20代も無関心ということで応募なんかしてこない。その辺りも追加するのかどうか。

(木村) 年齢は、20～40代と、50代以上の2層でしたよね。

(土田) おそらく学会員のほうは、少し年齢層が上に上がると思います。20代の学会員で、こういうフォーラムに来るといふ人は少ないと思うので。そうしたときに、目上の方が年下の人に話を聞かせるという構図にならないようにするのか、それを許容するのか、それを考える必要はあるだろうと思います。

—— すみません、次回以降の参考のための質問なのですが、首都圏調査（本調査）の年齢の分布というのは、どんな感じになっているのですか。回収の時点で20代が少ないのではないかと思うのですが。

(土田) エリアサンプリングをしていますので、国勢調査にあわせて強制的に割り付けています。

(木村) そのバランスになるように配布しているわけですね。

女性2名は採用するというので、男性6名をどう考えていくかですね。

その次は賛否で分けるという話になっていましたけれども、賛否はほぼ変わらないのですよね。

(土田) 今申し込んできている人たちの中では、そうですね。でも、追加票がありなのであれば、そこは少し考えてもいいと思います。反対の人だけでやるなら、このフォーラ

ムは目新しさが無いのではないかと。

(木村) いや、そうなのですが、だからどこにどういう追加をするかを考えなければいけないので、少し今、分布を見てください。(分布を検証)

—— 本調査の賛成反対の比率にできるだけ近いほうがいいですよ。

(土田) 合わせるという形でスポンサーには説明はしてあるのですが。

反対の人たちと専門家の対決みたいな構図になっていいのかな？ という思いはありません。私の個人的な思いですけど。

(個人情報のため削除)

(木村) でも、応募してきた人を断るのも、少し抵抗があるのですよね。

(土田) でも専門のほうは落としていきますから。

(木村) 専門のほうは数があるからいいのですが。首都圏住民のほうは、応募した人を落とした、となると、社会的に微妙かなと思って。

(土田) それは考え方ですよ。だって、落とすことを前提に設計しているわけですから。理念があって落としたならいいじゃないですか。はじめから、ある基準に従って選ぶという設計になっているわけだから。

むしろ、そういう設計をしておいたのに誰も落とさないほうが問題だと思いますけど。

(木村) 元々の設計は、選ぶときにはこういう順番で選ぶけど、足りなかった場合は融通するということですよ。そこで何をどう優先するかです。どうでしょうか。

—— 女性は明らかに足りないんで、あと2人女性を補充して10人にしたほうがいいのかと思うのですが、その女性は、できれば、賛否でいえば中間かやや賛成くらいの人を選べれば一番いいと思うのですが。

—— 2人だけ追加するのではなくて、8人のうちの何人かを落として、その分も追加するかどうか、という話ですよ。1人外したら3人追加することになるし、2人落とせば4人追加。そのほうがいいのか、8人はとりあえず全員選ぶか、という議論ですよ。

でも、ああ、自分は落とされたんだということは分かるわけですね。そのときに、なぜ

落とされたかをはっきり示さない。

(土田) ただ、このデータ(申込書の回答)までは公開しないです。これは、個人情報ですから。

(木村) ですから、F9-5とF9-6は取扱いに注意してください。

—— 申込数は公開するのですか。

(木村) それは、出したほうがいいですね。

(土田) ええ、そこまでは出しましょう。

—— 申込数8で、採用が6、とか。

(木村) そういうことです。

例えば、「申込数は8、採用は6、4人は追加という形。賛否のバランスを見て、そのようにしました」。そういう形でやらないといけないかなという感じですね。

—— なんとなく、8分の6というイメージを私も持ちましたけど。あまりリジットに6と思ったわけではなくて、なんとなくですけど。全体の分布に合うような形に軌道修正をして。そうすると議論の広がりがいいんじゃないかなと。

(土田) 私の専門分野からいいますと、フォーラムに参加して意見が変わっていくということを想定しているわけですよ。

2種類変わり方があると思います。おそらく、学会員の方々は、原子力賛成というところからぶれることはないでしょう。そうすると、(市民が専門家を)よく理解したという形で、賛成の方向に意見が変わってくるというのが変化のひとつです。でも、逆に、ますます反対のほうに意見が変わっていくということもありえます。そうすると、あまり極端な人だと、ブーメラン効果というのですけれども、逆方向に変わるというのが測定できなくなるのです。

元々賛成だった人が反対のほうに変わるということは、今回の場合はないと思いますけど、ただ、元々賛成だった人が専門家と話して、よく理解したらやはり反対になりますみたいなことがあるのであれば、むしろ、情報の出し方をどうしたらいいかということの知見にはなっていくですね。



(個人情報のため削除)

(土田) これは最後に言おうと思っていましたけれども、少し考えておかなければならぬのは、誰にも知られないアンケートへの回答と、皆の前で意見表明する意見が同じとは限らない。このご時世だと、反対と言っておかないといけないのではないかというプレッシャーがかかっている可能性はあります。

だから、社会調査本体では「どちらでもない」とか「どちらかといえば賛成」に丸をつけていても、申込書には「反対」に丸をつけてきたという可能性もあります(申込書は記名式なので)。その辺は深読みをしないといけない。

—— 原子力学会の名前でアンケートをしているわけでしょう。そうすると、そういう力がはたらく可能性はありますね。

(土田) 学会に対して喧嘩を売る必要もないしという形で丸をつける人もいるだろうし。人前では反対と言っても、本音のところでは「でも、(原子力が)ないとな」というような人たちが、おそらくいる。

(木村) さて、どうしましょうか。誰を採用して、どういう属性の人を追加で探すかということを決めないといけないのですけれども。

—— とりあえず、確定している人から挙げていきましょうか。

(木村) 女性2名は確定したほうがいいですよ。

(土田) そうですね。

(木村) では、女性2名は採用ですね。

女性をあと3人追加しますか? 男女は5人、5人にしておいたほうがいいですよ。

—— できるなら5人、5人がいいですよ。

(木村) そうすると、女性は3人追加。

(土田) あとは、子供がいるかどうか、実は気になりますね。

(木村) それは申込書では聞けないので、難しいですね。

—— 追加の人はどうやって探すのですか。

(木村) 知り合いの知り合いをたどるしかないですね。知り合いだと近すぎるので。

—— 顔を知っている、くらいは、まずい？

—— 顔を知っているというのは、知っているわけですからね。

(木村) たぶん、知らないほうがいいですね。

—— できれば知らないほうが。やはり、知っている人がいるということで、バイアスがかかってしまっているのです。

—— じゃあ、その人経由で誰かを探してもらおうと。

(木村) それがいいと思います。知り合いに、誰かを紹介してくださいというお願いをするのがいい気がするのですよね。

—— そのときは、制限は性別と年齢だけですか。

(木村) 性別と年齢と、賛否がどちら側かという話ですね。

「やめるべき」「どちらかといえばやめるべき」という方が多いので、「どちらかといえばやめるべき」が1人、「どちらともいえない」が1人、「どちらかといえば利用すべき」が1人、ぐらいのバランスかなと思っているのですが。

(土田) ただ、意見に関しては難しいですね。あなたはどんな意見がありますか、と聞いても分からないので。やってもいいと言われたときに、申込書を渡して、また密封して東大宛に郵送してもらおう、というぐらいですかね。

(木村) そのほうがいいですか。

(土田) やってもいいと言ってくれた人に、ついては、これが正式な申込書だから、これを書いてくださいと。見たらアンケートがついていたと。

(木村) それがいいかもしれないですね。

—— そうすれば、予想以上に来たときに、また選択できますね。

(木村) そうしますか。

—— だって、誰かに頼んで、必ず来るとは限らないし、意外と多く来ちゃうかもしれないから。

(木村) そうでしょうか。少し余分をお願いをして、申込書を渡して、私のところに直接来るようにセットしておく。

(個人情報のため削除)

(土田) フォーラムをやるときに、あまりに高齢の方というのは、大丈夫ですか。

(木村) いや、全然問題ないと思いますよ。あまりに高齢って、いくつくらいを想定していますか。75歳を超えてくると厳しいかもしれないですが。

—— シニアのメールのやりとりを見ている、やはり相当高齢な人は、誰が何を言おうが、言っていることが全然変わらないというのがありますね。

(木村) そういう意味では、できれば50代とか、60代のほうがいいかもしれませんね。

はい。では、女性のほうは3人追加ということで、少し余分に申込書を回しながら、知り合いの知り合いに配ってもらうということでお願いします。

男性も、5人採用でなくて、減らしたほうがいいでしょうか？

(個人情報のため削除)

(土田) 男性は、5人ということであれば1人は落とせるのですが、さらに落としたほうがいいですか。

—— そうですね。さらに(2人)落として、1人は追加応募する。そのほうがいい気がしますね。1人だけ落ちるとするのはちょっと。

もし落とすとしたらこちらの方でしょうか。強烈な方ですから。

—— 実際の分布上にも強烈な方はいらっしゃるわけですから、強烈だからという理由だ

けで落とすのは、分布には沿っていないのですよ。

—— そうですね。

賛成側の強烈な方がいないのも不思議ですね。

(土田) まあ、そうなのですが、一応正規分布していますから、端にいけばいくほど人は少ないわけです。

(木村) F9-7を見ると、「やめるべき」という人は、5人に1人はいるのですね。

(個人情報のため削除)

(木村) 中間的な人を2人入れるのは、妥当ですか。

(土田) おそらく、「利用すべき」というはっきりした意見を言う人は、首都圏住民の場合、アンケートでは取れないと思います。やってみないと分かりませんが。

(木村) 一応本調査では、「利用すべき」は5人に1人はいるわけですね。

—— そうですね。賛成：中間：反対が、1：1：2くらいの割合で入れたいという感覚があります。

(木村) そう。だから、「3. どちらともいえない」を2人入れてしまうのが、妥当なのかどうか。

(土田) 賛成の人を追加で連れてこれるかどうかが問題です。連れてこれるなら、「どちらともいえない」を2人入れる必要はないです。でも、なかなか難しいのであれば、ここで入れておいたほうがいい。

でも、追加募集した人の答えを見ながら、また改めて決めるという手もありますよ。

(木村) ただ、決定は2月の終わりから3月の頭に通知しますと言っています。

(土田) そうか。時間がないのか。

(木村) はい。

フォーラム検討会議としても、決定しないと業務が終わらない。再委託業務が終わりま

せん。だから、2月中に決めなければいけない。

決められるところは全部決めて、追加でこういう人たちを入れますというところまでは決めて。少なくとも業務としては、NPO で決めなければいけない。

では、安全のためにも、中庸意見の2人は入れておきましょうか。

次は、私は強烈な方を推すのですけど。

—— 私も推すのですけれども。その理由は、文科省としては、おそらく変化したということが見たいと思うのですけれども、学術的に考えたときには、思い切り偏っている人と相互理解しようとしたときに、できなかったということもある意味ひとつの結果ではあると思うのですよね。そういうことを記述することに意味はないのでしょうか。

(土田) いや、あるでしょう。

(個人情報のため削除)

—— そうすると、女性3人、男性1人を追加すると。

—— 追加する男性は、20～40代に絞ってもいいのですか？

(木村) 若い人ですよ。考え方は何でもいい気ようになりますね。「どちらともいえない」を2名入れているので。男性は、年齢だけ制限をつけて、考え方はどちら側でも構わない。

(個人情報のため削除)

(木村) 分布からすると、女性も若い層を1人追加したほうがいいですね。

その他に女性2名必要ですが、複数人アタックして、再度決定のプロセスを取るのがいいですか。

—— 女性のほうは、どういう方がいいのですか。

(木村) 意見のバランスが良くなるようにしたいですね。「どちらともいえない」という中庸側がいいかと思います。強烈的な「賛成」の方でもいいですけど。「反対」の人はいますから、どちらかといえばという中庸側の人を選ぶのがいいかなと思います。

それでは、市民の参加者は、年齢と、賛否の意見分布に合わせていくために、6名は決定、残り4名追加するという方向でお願いします。

(土田) では、次は専門のほうに移ってよろしいですか。

(木村) はい。では、一応確認です。2名の方は外すことにします。

追加は、男性1名。これは20～40代がいいのではないかと。女性は3名。そのうちの1名は20～40代を入れておくのがいいのではないかと。その他に女性は2名追加ですが、これは何人かにあたって、その中から選択していくことにしたいと思います。

—— それは、もうお願いしてしまっているのですか？

(木村) はい。どういう方式にしましょうか。封筒とか用意したほうがいいですね。

(土田) それはそうですね。

—— でも、最初に相手に趣旨を伝えるじゃないですか。それはメールのほうが早いですね。でも、あまりあちこちに広がってしまうとまずいですか。

(木村) あまり分散しすぎてもまずいかもしれない。でも、もういいですね。

(土田) いいと思いますけど。フォーラムの仕様書に関しては、ウェブで公開するでしょう。

(木村) します。申込書も公開しますよね。

(土田) たぶん。でも、申込書は印刷したものを渡したほうがいいですね。あとは返信用の封筒と。

—— だから、趣旨をメールで説明して、やってもいいですよとおっしゃったら、申込書を送る。最初はメールのほうが早いそうですね。

(木村) そうですね。

—— OKと言ったら、資料一式をお送りしますと。これがいいですね。

(木村) そのほうがいいですね。

—— 木村先生にその人の住所を伝えて、木村先生から郵送してもらうということですか。

(土田) そのほうがいいです。手間さえなければ。

(木村) そのほうがいいのだけど、神崎さん、お願いできますか。私はたぶん、2月中はほぼ動けないから。

(神崎) はい。それは私がお送りするようにします。

(土田) そうしたら、輿論科学と同じように、気付という形で神崎さんのところに返信が来るようにしましょう。

—— 誰になったという結果は、いつごろ公表する予定なのですか。

(木村) 今日決まった分は、2月中には、採用になりましたという連絡をします。

—— プラス4名は？

(木村) それは順次ですね。

(土田) では、原子力学会員のほうに移ります。

(個人情報のため削除)

(土田) すみません、ID5番は候補から外してください。

それから、ID33番ですが、この方は申込書に住所氏名を書いていません。こちらも候補から外しましょう。

(木村) では、有効回収数は23通なのですかね。

(土田) それで、交通費なのですが…。

(木村) 一応、数名分は計上していますので、とりあえずグループ分けから始めてもらって、その後、私と神崎さんの目を見ながら話していただければと思います。

(土田) 旅費に関しては明示していないですよね？ あ、謝金は交通費込みと書いてあ

りましたか。

(木村) そうです。謝金は交通費込みでと書いてあります。

(土田) 専門家にもそう書いていますから、手弁当で来るという覚悟もあると思います。

(個人情報のため削除)

(土田) 意見はもう見ての通り、少し例外がありますけど、ほとんど賛成側です。原子力学会は一枚岩ですから。意見で選ぶのは無理で、専門分野だと思います。あとは経歴。

—— それと、女性が2人いますよね。

(土田) ええ。この2人の女性は外せないですね。

—— この2人は決定ですか。

(木村) 決定でしょう。

賛否で「3. どちらともいえない」が23人中2人というのは、本調査の割合でいうと、すごく偏っていますね。

(土田) 偏っているも何も、1がこんなに並ぶことは普通はありません。やはり、それなりに特定の意見を持ったグループにアンケートをやったということです。

(木村) いえ、本調査と比べたときに、3の割合が大きいということです。

—— 「どちらともいえない」を2人入れたらまずいという感じはありますか。

(木村) まあ、別に入れてもいいと思いますけど。

Q7の不安は、少しばらつきがあるのですよね。これは考慮に入れてもいいのかなという気がしますがね。

(土田) 少し特殊な回答をしている人をまずは挙げてみましょうか。

(個人情報のため削除)



—— ちなみに、私は「総論」という分野があまりイメージがついていないのですけれども、「総論」にチェックをつけている人というのはどういうイメージをすればいいのでしょうか。

(土田) 私のような人。

(木村) 私のような人。

—— 要するに、特定の専門分野以外の人、皆「総論」なのです。

(木村) 原子力技術を持っていない人です。「総論」しかついていない人は本当に「総論」しかやっていないのだけど、2つ丸がついている人は、もう1つのほうがいわゆる専門分野です。「総論」のことにも興味がありますと。そういうタイプです。

ある程度特殊な人たちを選んだら、あとは領域で分けるのでしたね。

(土田) 領域でしょうね。

—— その前に、不安側の意見の3人の中から1人入れたほうが。

(個人情報のため削除)

(木村) 「不安」な人は2人ぐらい入れますか。

(土田) 2人入れてもいいですよ。

(個人情報のため削除)

—— 専門分野の分布で提案ですが、「総論」を2人、「放射線工学」を1人、「核分裂」を2人、「材料」を2人、「融合」を1人、「保・環」を1人、これで9人で、まんべんなくするのはどうでしょうか。

(木村) 「総論」を2人というのは、難しいのですよ。「総論」の人はいろいろなところに丸をつけているから。

(個人情報のため削除)

(木村) 今 5 人決まっていますよね。その専門分野の分布を確認します。

「総論」が 1 名、「放射線工学」が 1 名、「核分裂」が 1 名、「材料」が 1 名、「保・環」が 1 名。

—— そうすると、今は分散しているね。

(木村) あと 5 人選べるので、結構いい感じですよ。

(個人情報のため削除)

(土田) 分野でいうと、「融合」の人がまだいないですね。

—— 「融合」に丸がついている人は、他の分野にもチェックを付けている人が多いですね。

(個人情報のため削除)

—— これで全部の分野から 1 名ずつ選ばれましたから、「総論」と「核分裂」と「材料」、この辺から選べると全体の分布に近くなりますね。「総論」と「材料」から優先的に探しませんか。

(個人情報のため削除)

(土田) ちなみに、ID 番号が若いほど、早く返してくれた人です。

(個人情報のため削除)

—— これで「材料」が決まり。次は「核分裂」ですね。

(個人情報のため削除)

—— あと 1 人ですね。

(木村) あと 1 人は、「放射線」からでしょうか。

(個人情報のため削除)

—— 意外と放射線の専門家の説明に間違いがたくさん見つかっているのですよ。どうして放射線のプロがそういう間違いをするのかなと思って。だから、放射線の専門家の人って、少しユニークなのかなと。そういう人の考え方を入れておくという手もあるのだけど。

—— 放射線の専門家の間違えているところは似ているのですか。

—— 放射線をやっている人は、メンタリティとして、どちらかというと批判的にいつも見る立場ですよ。職業柄。だから、アンチの人たちに引きづられやすいというか。常に批判側で見なければいけないという意識を持っている人たち。

—— 研究所でいえば、放射線管理の配属は皆嫌がるのですよ。研究部門にいきたくって。場所を変えてくださいという人は多かったですよ。

(個人情報のため削除)

—— 専門家が 10 人いて、不安という気持ちに共感してくれる人が 3 人くらいいてもいいのかなと、単純には思ってしまうのですが。

(木村) ただ、全体のバランスを考えると、3 人は多すぎるのです。10 人いて 1 名、多くて 2 名。バランスからすると。

—— 不安側の人が、もうすでに 2 人選ばれているのですよね。

—— すでに 9 人で、あと 1 人だから、「放射線」から無理に選ばなくても、「核融合」とか「保・環」のほうから選んでもいいかもしれない。

(個人情報のため削除)

(木村) では、これで決定します。旅費が必要かどうか問い合わせる必要があるのは 2 名、妥当な線ですね。

(個人情報のため削除)

では、学会員のほうは無事確定ということで、これでメンバーの確定は終わりにしたいと思います。

さて、残り 1 時間ですが、少し休憩を入れましょうか。5 分ほど休憩して、後半に入りたいと思います。

## 2. 「コミュニケーション・マニュアル」の検討

(木村) では、再開したいと思います。

次は、コミュニケーション・マニュアルの検討です。F9-8 ですけれども、前半は、前回からほとんど変わっていません。後半のファシリテーションルールについて、私と竹中君で検討しましたので、こちらを読んでいただいて、気づいたところを順不同で言っただくということをしてしたいと思います。今から 10 分くらい時間を取りますので、6 ページから 12 ページまで目を通していただいて、気づいたところをチェックしてください。それでは少し時間を取ります。

(資料に目を通す)

(木村) そろそろ時間ですが、大丈夫でしょうか。

ファシリテーションルールについてですけれど、6 ページにあるように、「ファシリテーション」という言葉は、本来は、場を作るところから始まり、まとめていって、合意を作るところまでということが使われているようですけれども、今回はその中でも、意見を引き出していくところのファシリテーションを中心にまとめています。この辺りを知っておくと、話し合いのときにも、人の意見を妨げないとかができるかなと思ひまして、このルールは共有しておこうかなと思っています。

ということで、何か気づいた点がありましたら、ご指摘をいただければと思います。

—— 単純な脱字だと思いますけれども、11 ページの「4. 誤解なく認識する段階で意識すること」の次の行が「誤解なく段階」になっています。「認識する」が抜けていますね。

—— あと、9 ページの上から 7 行目、「話し合いの進み方によっては、」のところなのですが、これも、「無かったことのように扱われるがあります」、「こと」が抜けています。

(木村) 後ろに画面が出ていますので、どこが修正になっているかを見てチェックしてください。

他はいかがでしょうか。

—— 8 ページの「2. うけとめる段階で意識すること」の②なのですが、「聞いてくれてる

な」とあるのですけれども、「聞いてくれているな」にしたほうがいいと思います。

(木村) 「くれてる」じゃなくて、「くれている」ですね。

あと、文章としておかしいのは、6 ページの 2 段落目、「合意をつくっていくことまでを含めます」はおかしいですね。「が含まれます」。

あと、少し違和感があるなと思ったのは、9 ページ目の「②話している人が、聞いてくれている、と感じられるようにする」という項目のチェック項目が「話している人が、聞いてくれている、と感じられるようにしましょう」。

①だったら、しっかり聞きましょう、促しましょうとか追加項目があるのだけど、②はこれだけ(同じことを 2 回言っているだけ) だなと思って、少し違和感があるのですが、仕方がないのかな。

—— 「話している人が、聞いてくれていると感じられるように、態度で示しましょう」とか。

—— 一番上の四角を抜いて、矢印を全部四角レベルにするというのは、どうですか。

(木村) 確かに、全部四角の項目にしてしまえばいい気がする。

—— 2 行目を消して。

(木村) そう。2 行目を消して、矢印を全部四角のチェックにすればいいですね。

あと、違和感があるのは、②の 3 つ目の矢印(四角に変更)で、「ときには、発言に対して、感謝の言葉を述べましょう」。その例が「その視点は面白いですね」。これは感謝の言葉なのかなと思って。

—— 少し違いますよね。こう書いてしまうと、お世辞ですよ。

(木村) まあ、「白々しくなるので、注意しましょう」とあるけど。「ありがとうございます」のことですかね。

—— 反対の意見を言った場合には、「貴重な意見をありがとうございます」と言いますよね。

—— よく言うのは、「貴重な意見」ですね。

—— それも「感謝の言葉」ではないですよ。 「感謝の言葉」というのをやめますか。

(木村) 「その視点は面白いですね」は別に構わないと思うのだけど。「感謝の言葉」というよりは、なんて言ったらいいのかな、英語でいうと、エンカレッジという意味ですよ。

—— 要するに、相手が言ったことに反応するということでしょう。

(土田) エンカレッジだと「励ます」なので、「励ます」までは言っていないわけでしょう。

(木村) ええ。「励ます」ではないですよ。でも、感謝の言葉という、ずれませんか。

(土田) 少しね。要は、聞いているんだということが伝わればいいのでしょう。

(木村) そうです。ちゃんと興味を持って聞かれているな、と思ってくれればいいということですよ。

—— 簡単に言えば、無視するな、ということね。

(土田) 逆に言ってもいいのですよね、確かに。

—— 「ありがとうございます」という言葉は、裏腹があるじゃないですか。

(木村) あります。

—— だから、あまり「ありがとう」ではないほうがいいと思います。

(木村) 「発言に対して、興味を持っているということを伝えましょう」とかかな。

(土田) それならこの例でいいですね。

—— アメリカにいたときは、**interesting** というのはいいと言われました。

(木村) なるほど。この例は、英語だともしかして **interesting** じゃないですか。

(土田) たぶんそうでしょう。

—— 「その視点は興味深いです」。

—— そうすると、日本語の「面白い」とだいたい意味が違いますね。

—— まあ、でも日常会話だと「面白い」ですよ。

—— うん、「興味深い」というのは、ちょっと仰々しいですね。

(木村) 「発言に対して、興味を持っているということを伝えましょう」の例が「面白いですね」なら、ああ、そういう意味の「面白い」か、と思ってくれるでしょう。

(土田) 関西では、「面白い」というのは最高の褒め言葉です。「意義が深い」とか「価値がある」よりもずっと褒め言葉です。

(木村) 他に何か。例えば、追加しておきたいことはありませんか。

—— 少し気になったのは、ここには非常に難しいファシリテーションのテクニックが書いてありますよね。これを崩す必要はないのだけれども、実際にやる時にはサブファシリテーターの人がついてくれるじゃないですか。サブファシリテーターの人は、ここに書いてあることがほとんどできる人たちなので、

—— すごいプレッシャーですね。

—— まあ、完璧じゃないまでも。だから、「随時サブファシリテーターに相談できる」ということを、何らかの形で伝えたほうが良いと思うのですよ。

これはマニュアルではなくてチェックリストだから、ここに書くのが適当なのかどうかよく分からないのだけど。

あまりこういうことに慣れていない人に、こういうことをちゃんとやれよというと、非常に硬くなってしまうというのがありますから。

—— そうなのです。緊張します。

(木村) そうしたら、実際にやる時には、「ファシリテーションのやり方も、迷ったら、サブファシリテーターにアドバイスを受けてください」ということを、ちゃんと参加者に

伝えるということですね。

—— アドバイスを受けるというのか、一緒に協力し合っというのか。やはりメインをやっていると、急に見えなくなってしまうって、ちょっと行き過ぎてしまうこともありますよね。

—— このファシリテーションの技術は、この前も議論があった通り、そのときにファシリテーターを務めている人だけではなくて、他の人たちにもいずれ順番が回ってくるから、皆に理解してもらうことが大事だと思うのですよ。

だから、ファシリテーターになった人がサブの人に相談するのも、他の人に聞こえるように相談してもいいんだよというニュアンスのことが伝わるといいですね。むしろ、そのやり取りを他の人に聞いてもらいたいわけです。

—— 今回のフォーラムは、まさしくそうですね。

—— そういうことを毎回やっていくうちに、皆そういうコミュニケーションの技量が高まって行って、自分のものの考え方がどう変わっていくかというところにつながっていくような気がするの。非常に重要なことなので。

これは、実践をやらないと、なかなか身につかないと思うのですよね。だから、そういう実践の中で、皆と会話をしながらファシリテーションのやり方を確認をしていく、それが非常に大事な気がしましたね。

—— 今のようなことは、このマニュアルに書くことではないのかもしれないけれども、やはり、「失敗を繰り返しながら実践してみることで身につけていく」みたいなことがあるといいですね。これを聞いただけではできないということ。

(木村) 終わりに入れましょうか。

—— だから「臆せずに挑戦してみましよう」みたいな。

(私たちの場合は) 毎回参加者が変わるから、毎回違いますよね。今回うまくいったと思っても、次は全然駄目だったり。

(木村) フラン・リースさんの本にも、皆がファシリテーションを分かってくると、会議全体の質が上がってくるという記述があるのですよね。だから、1人だけが身につけてどうにかすればいいということではない。皆がそういうルールを共有していくと、会議の質が上がっていくということがありますから。



ある意味では、ちゃんとした会話をしながら相互理解をするというのは、それなりの、リテラシーと言っていいのか、コンピテンスというのか、そういうものがどこかに必要なのかなとは思うのですよね。

—— 私がこの中で一番重要だと思うのは、11 ページの下から 4 行目に書いてあることですね。4 つに分けて話す。この資料の最初に出てくる話でもあるのだけど。これが理解できるかどうかが一番重要だと思います。

(木村) これは難しいですよ。

—— このあいだ、会議が終わった後だったか、旅先だったか、いろいろな話をしているときに話題になったのですが、このフォーラムの第 1 回目のプログラムで、先生が最初にこの講義をしますよね。それはすごくいいのですが、一般市民の人がその講義を聞いたときに、この後の会話は、このルールを守ってやらなければいけないのかと思ったときに、すごくプレッシャーを感じるんじゃないかなという意見があったのです。

むしろ、1 回講義を聞いて、何回かグループワークをやった後に、最後にもう一度講義を聞くと、実践をやった後だからものすごく理解が深まるという気がするのです。

だから、講義が最初がいいのか、グループワークをやった後のほうがいいのか、その辺はどうなのかしらね、っていう話が実は出たのですよ。

—— 講義をどこに挟んで、実践と組み合わせるか。どこがいいかしらという話をしたのですけど。

—— なんでこんなことをこの先生は言っているのかしら、って。

—— そう。それが分からないじゃないですか。

こういう話を聞くためにフォーラムに参加したんじゃないんだけど、って思いますよね。

—— いつになったら原子力の話をするのかって。

—— 一応、どうしてこれが必要かということは話はすると思うのだけど。

—— 本当は 1 回グループワークを経験した後にこの話を聞くと、ああ、自分はこれが全然できていなかったとか、なるほど、ああいうときにこういうことを知っていれば、もっとちゃんと自分の意見が言えたのかとか、分かるのですよ。

(木村) そうすると、第 1 回は講義なしで、グループワークはもう少し余裕を持つようにして、それだけをがっちりやって。第 2 回の頭に講義をやる。そうしましょうか。

—— でもそうすると、第 1 回るときに、何の指針も持たずに、いきなりファシリテーションをやってくださいと言われる人がたくさんいるわけですよね。その状態でやるということ？

—— でも、1 回講義を聞いても、すぐはできないと思うのです。

—— どっちみちできないけど、何の指針もなく、急にあなたが進行役なのですよ、やってくださいって言われたら、ものすごく不安な気がするのですけど。

—— だから、この資料は事前に送って、目を通していただくとか。

(木村) 資料は、そうするつもりです。

—— そして、「今回はグループワークのときに、皆さんに交代でファシリテーションを経験していただきます」くらいのことを書いておくと、もしかしたら一生懸命読んできて、中にはこういうことをやってみようと思ってくる方もいらっしゃるでしょうし。

—— もし実践を先にやって講義が後だったら、その実践の中で、この資料をお手元に置いて、少し参考に見てみてくださいと最初に言うとか。

もし講義を先にするのだったら、少し内容をコンパクトにして、今日はここだけ注意してやってみてくださいと言って、その後実践をやって、その後じっくり講義をすとか。

何か工夫をされるといいかなと思います。

(木村) だから、コミュニケーションルールは先に話してもいいかなと思って。ファシリテーションルールは難しい。

—— 難しいですね。聞いてすぐできることじゃないし、経験がなくてこれを聞いても、何のことを言っているのか分からない。もしかしたら市民の方は不安に思うかもしれないなと思うのです。

(木村) そうですね。

コミュニケーションルールのほうは、ずっと分かる内容だと思うのですよ。で、この事業の目的と絡めながら説明すればいいかなと思って。今回こういうフォーラムを企画する

にあたって、我々の中では、話すときにこういうことを整理すると、よりよく話し合えるのではないかと考えていますと。この辺りを意識しながらやっていただけると幸いです、みたいなことを言って。最初の講義はそのくらいにして。

それで、第 1 回はグループワークの時間をたっぷり取って、お互い意見を出してみるといいかもしれませんね。

この前模擬フォーラムをやってみて、少し時間が足りないですよ。

—— 足りないですよ。

—— あんなに順調にやって、ギリギリでしたから。あれを、集まった見ず知らずの人たちであの時間の中に収めるのは相当難しいでしょうね。

—— そうですよ。私たちは、普段から頭の中にあることを書いて出したわけですから、あの時間でできたけど。

—— そういう手馴れた人たちでギリギリでしたからね。

(木村) 時間が倍くらいはほしいかもしれないですね。ありすぎると今度はだらけちゃうので、難しいところなのですけれども。

—— 講義を 30 分減らせれば、グループワーク 1 回につき 10 分増えますから。

—— それで、第 2 回の頭に、木村先生のファシリテーションの話を知ると、場面場面が思い出されて、身につくような気がするのですよね。

(木村) 第 1 回、第 2 回はそんな感じでやるようにしてみましようか。そのほうが時間的にも余裕があるし。

—— 最初から〔概念〕〔論理〕〔規則〕〔感情〕を説明して、これで話し合おうと言っていると、意見が出なくなってしまうような気がするのですよね。だって、反対とか不安を持っている人はそこを訴えたいわけだから、〔感情〕ばかりになっちゃうじゃないですか。そこを分けなさいと言われてたら。

—— でも、このように話したほうが、皆さんに理解ができますよという話だから。

—— いや、1 回やってからだとそれがよく分かるけど、

—— いや、コミュニケーションルールは説明するのですよね。私はこれは言ったほうがいいと思うのですよ。

(木村) コミュニケーションルールは、簡単に説明します。

—— やはり、反対する人でも、コミュニケーションルールを聞くと、「〔感情〕だけじゃないよな、ちゃんと〔理論〕も話しているよな」とか、少し整理がつくと思うのですよね。

(木村) 〔感情〕に、理由を考えるようになるのではないのでしょうか。

—— そうですよね。理由をつけるようになりますよね。

ファシリテーションルールのほうまでいくと、少し難しいかもしれないけど。

(木村) でも、ファシリテーションルールは、元気ネットの皆さんはぜひ実践してみてください。

—— できませんよね。分かっているつもりだけど、いざ始まってみると、全然。

(木村) 時間との戦いになってきますからね。

—— そう。次はこうしたいと思っているときに、延々と長くしゃべられると、違う感情が漂ってきて。

—— 人が話しているときに、自分の意見は考えないようにしましょうと書いてあるけど、意外と、話が長くなってくるといろいろなことを考えそうですね。

—— 早く終わらないかなって。

—— どこで切ろうかなって。

(木村) ということで、こんなところでマニュアルとしてはまとめていきたいと思いません。

実際に使ってみながら、付け加えるところも付け加えていくし、本当はここに事例を入れていくという話もしていましたから、フォーラムをやりながら、具体的な事例も入れら

れるようになってくると、より充実するかなと思います。

まずは最初の骨組みということで用意をして、来年度、これを活かしてやっていきたい  
と思います。

—— 最初から考えると、ずいぶんブラッシュアップしましたよね。

(木村) これで本を書きましょう。

—— 参加者は、これを勉強したことが、ひとつの大きな財産になって帰れると思います  
よ。

—— これに事例があれば、本でもおかしくないですね。

(木村) そうだと思います。で、前段は少しリスクコミュニケーションの話も挟めば。  
今、そういうところでどういうコミュニケーションをするか、いろいろ燃えていますから。

—— ちょっといいですか。11 ページの、「話し合いの中で、更に掘り下げる質問をしまし  
ょう」の一番下の矢印なのですが、これから事例が出てくると分かるかもしれないので  
すけど、「掘り下げる質問をたくさんつかいすぎると、ファシリテーターが話題を誘導して  
いるように感じられ」と書いてあるのですけど。

—— 最近、よく言われるんです。

—— 例えば模擬フォーラムのときに、最後に背景を書きましたよね。そこで、語ってい  
る方に対してどんどん掘り下げていくと、誘導しているように感じられるということだ  
か。

(木村) たぶん、誰か特定の人を掘り下げてしまうので、他の人を掘り下げられなくな  
って、あ、この人（ファシリテーター）はここが一番話し合いたいんだな、みたいな不公  
平感が出てくるということです。

—— そうですね。主観を交えずに掘り下げればいいのですけど。

この人の意見は面白そうだから掘り下げよう、となると、誘導になる。

—— でも、そうなりませんか。

—— なります。掘り下げるのであれば、本当は皆平等に掘り下げなくては行けないと。

—— 面白くない意見を掘り下げても…。

(木村) そうなのですけど。

—— じゃあ、時間に余裕があって、全員に掘り下げができるのだったら OK だということですか。

(木村) そうなのです。だから、この前模擬フォーラムの方式は、会話で掘り下げるのではなくて、書いてもらったじゃないですか。皆が皆、自分で掘り下げていくという作業を平等にさせているのです。そして、読み上げて貼る。そうすると、皆自分で自分を掘り下げているから、平等なのですけど。

これが、会話でそういうスタイルができればいいのだけど、そのさじ加減が難しいのだと思います。

—— この前は、特定の意見の掘り下げはやらなかったですね。

(木村) ませんでした。

—— 背景を書いて、終わり。なぜそう思うのですか、というのが掘り下げですね。

(木村) 本来はそうです。

—— 一般的には、やはり面白い発言に対して掘り下げをするから。ああ、皆これを聞きたいだろうなというところを掘り下げるけれども、それを平等っていうのはなかなか難しいですね。

(木村) 難しいです。そうなるように、掘り下げ合うような場を作らねばならないですね。

—— すごく難しい。

(木村) でも、皆がそういうファシリテーションに慣れてくれば、運営側が何もしなくても、「皆さん、お互いの意見で分からないところを掘り下げてみてください」と言うだけで、掘り下げ合ってくれるようになるかもしれない。

—— お互いに質問をしたりとか。あるいは複数の人から 1 人の人に同じような質問が重なっていけば、じゃあ、そこを掘り下げていきましょう、でだいたい合意ができるよ。

(木村) でも、ちゃんとこのルールに従って、否定はしない。「いや、これは俺と違うから、これはなくていい」という人がいなければ、ちゃんと成立していくと思うのですよね。そこまでいくのが大変ですよ。

—— このファシリテーションルールの理解度とか応用にあまりにも差があると、やはりそれは難しいですよ。

私たちは地域ワークショップをしていて、サブの経験がそれぞれ回数が増えてきているわけです。私たちはサブで、表は地域のファシリテーターの人がしてくださるけど、その方は初めての経験なのです。それで、これは掘り下げるともっと話題が豊かになって面白そうだなってことを、つい口に出してしまったりするのですよ。そうすると、誘導したとか、最近言われることがよくあるのです。

—— どなたに誘導したと言われるのですか。

—— 地域のファシリテーターの方が、元気ネットが誘導したとか、畳みかけたとか、よく言われるのですよ。

—— 地域ファシリテーターが報告書を出すことになっているのですが、その報告書にそういう記述があったりするのです。

—— そのときに、自分のファシリテーションがどうだったかというのは？

—— いや、それはもう、全く素人ですよ。初めてやるのだから。だけど、ご自分はそうは思っていない。

—— 自分ができていないから補ったという理解ではなくて、誘導したというような理解なのですよ。

—— 余計なお節介をしたと？

—— そう。そういうニュアンスで書かれる場合があるのです。

(木村) だから、来年度はこれを使って、ファシリテーターには、まずはこれを一読しておいてくださいと。で、終わった後に、今回できたかどうかを全部をチェックをしてくださいと。

—— 今紹介されたケースでは、こんなマニュアルはファシリテーターの人に配っていないのでしょうか？

—— こんなに細かいのは配っていません。平等に進行してくださいとか、参加者の意見をなるべく引き出してくださいとか、その程度です。

(木村) だから、これはノウハウ集であるとともに、チェックリストにもなるので。開始前に読んで、ああ、こういうのもあるなというのと、終わった後に、ああ、ここが駄目だったなというチェックと、両方できるので。

—— だから、地域のファシリテーターの方の報告書の中に、こういう項目を入れるといいですね。グループでどんな話し合いをしたか、ではなくて。あなたは、ファシリテーターとして、この部分はできましたか、みたいな項目があるといいのかもしれない。

(木村) ええ。それをいきなりやると「え？」ってなるから、最初にちゃんとマニュアルを渡しておいて、こういうところを気をつけてくださいと。

—— 最初にちゃんとその項目は読んでおいてもらって、

(木村) できたところを自己採点してください。

—— 私たちも事前に読んでおいたほうがいいかも。

(木村) コーチングをやっていると、そういうのがよくありますよね。

だいたい大丈夫でしょうか。それでは、ファシリテーションルールは、少し終わりに追加する形を考えたいと思います。

### 3. その他

(木村) F9-7 は、前半は申込書の話題なのですがけれども、後半は原子力に携わっている人・組織に対する印象の結果を出していて、興味深い結果が出てきています。この辺りは、



明日の全体会合がありますので、そのときにじっくりと土田先生から解説をいただけるということです。

(土田) この部分がコアですね。

(木村) この部分がかなりコアになってくると思います。特に、このプロジェクトとしても、ムラに関する意識がどうなのかというのを把握しておく、いろいろと面白いかもしれない。

—— これはまだ、どこかに転載、記述はできないのでしょうか。

(木村) 2月末くらいには、ホームページにここまでは出します。

—— 公開されるのですか。

(土田) これは公開ですね。これまでもずっと公開していますので。原子力学会の大会でも、要点だけ発表します。

(木村) これをさらに分析したりするのは、別枠で研究にしたり。

それでは、フォーラム検討会議も 9 回まで数えましたけれども、これで一通り終わりのことになります。どうもありがとうございました。

本当は、ファシリテーターのためのマニュアルも検討が必要だったのですが。それから、報告書の案 (F9-9) も竹中君に作ってきてもらっています。これは会議で議論するのは難しいですので、持ち帰っていただいたり、あとでメールでもお送りしたりしますので、何かあればコメントをいただくという形で対応させていただければと思います。

ということで、今年度はこれにて終了ということで、どうもありがとうございました。また次年度、よろしく願いいたします。

以上